

神はどこに、どのように、存在するか？

——ビッグバン理論を踏まえつつ——

遠藤 徹

科学の最先端の見解が「宇宙万物の創造者」としての神を否定しそうであるとき、キリスト教の側はそれを無視したままでいるべきでなく、誠心誠意それに答えることが、神に対しても、人々に対しても、あるべきことではないか。

——本稿は、そういう思いから、問題に取り組む一つの試論である。

一、「神」とは何か

きちんと問題に取り組むためには、当然のことであるが、「神」という言葉で何を指すのかを、自らにも、読み手にも、はっきりさせておかなければならない。

ここで問題にするのは聖書を聖典とする諸宗教（キリスト教・ユダヤ教・イスラム教）が「神」と呼んでいるも

の、つまり聖書の冒頭に記されている「天と地の創造者」のことである。「天と地」という言葉は、聖書が書かれた当時には「天空」としての「天」と大地を指していたかと思われるが、この二語の組み合わせによって言い表そうとしたものは「自然界のありとあらゆるもの」だったであろう。従ってそれを現代人の拡大された知識で捉えれば、「宇宙とその中のすべてのもの」と言ってよいであろう。ここでは「神」とは「宇宙とそこにある一切のものを過去、現在、未来に亘って有るようにさせている一番大元の、究極の、存在」であると押さえてよいであろう。

二、聖書が「神」と呼ぶものは人間に近いか

ところで、日本の多くの現代人は、聖書が神と呼んでいるものは多分に人間に似ているものだと思ってしまう。確かにそう受け止めるのはやむを得ないところもある。聖書には神の「御顔」とか「御手」とか「御声」とか「御足」とかという表現がたくさん出てくるからである。そして何よりもいわゆる「神の似姿」(inago Dei)としての人間ということが記されているのである。さらに、三宗教の信者達は神に向かって言葉で話しかけて祈っている。

しかし聖書に記されている神を信仰している当の三宗教が一貫して極力排除してきたことは「偶像崇拜」である。⁽²⁾ これらの宗教が偶像崇拜というものをどれほど厳しく排除してきたかには驚くべきものがある。その歴史は偶像崇拜との闘いの歴史だったと言っても過言ではない。

これから私たちが神を問題にするときも、このことは一貫して堅持されなければならない。つまり神は宇宙と
その中に存在するものの如何なるものとも同じではない。姿形が似ているということもない。そもそも神の「姿
形」というものはない。神は肉眼に見えない。見えるものは神ではあり得ない。想像の中で思い浮かべられた、
作り上げられた、姿形のある如何なるものも神ではあり得ない。当然人間の姿をしたものとして捉えられてはな
らない。

三、では、神とはどういうものだ？と聖書は言っているか

聖書が神についてはっきりと書いていることは、以下のことである。

- ① 天地（宇宙）の創造者、つまり宇宙を有らしめている最根源の、究極の、存在⁽³⁾。
- ② 「ヤハウェ」つまり「私は 在る」という名である。⁽⁴⁾
- ③ 「霊」である。聖なる霊（聖霊）である。⁽⁵⁾
- ④ 「真実な」方である。⁽⁶⁾
- ⑤ 完全な「愛」の方である。

⑥ その他、「全知」であるとか、「全能」であるとか、「無限」であるとか、「永遠」であるとか、「真理」その
ものであるとか、「最高善」であるとか、いろいろに言い表されて来ているが、そしてそれに当たる、或い
は類する表現は聖書にあるが、神学が発達してから論理的に必然的に導き出されることを述べている場合も

ある。

⑦「人間は神を知り尽くすことは出来ない」ということは三宗教の最も基本的な考えである。これを踏まえれば、「神」とは「宇宙とその中にある一切のものを過去、現在、未来に亘って有るようにさせている究極の存在(X)」である。

——神のなされることは皆その時になくなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。」(伝道の書3・11 口語訳) ——

「神はどこに、どのように、存在しているか」を問題にするときに最も重要になることは以上の中で①、②、③である。本稿では①及び③のみを取り上げる。

四、神が天地の創造者、つまり宇宙を有らしめている最根源の、究極の、存在であるとはどういうことか？

聖書が「神」と呼んでいるものは宇宙の創造者である。この神は宇宙の始まりに関する現代科学の最先端の研究とどう関係するか？二つは衝突するか？それとも調和するか？

(イ) 現代科学の最新の研究によれば、宇宙の始まりはどういうものか。

まず、平易に書かれた朝日新聞の記事「神の一撃か、無から誕生か」(一九九六年九月二五日、夕刊)を紹介したい。これにはいわゆるビッグバンによる宇宙誕生説が一般人にも分かり易く解説されている。

神の一撃か、無から誕生か —— 宇宙、始まりの前 ——

私たちの宇宙はビッグバンと呼ばれる大爆発でできたという。だが、この宇宙が始まる前は、何があったのだろう。

.....

ビッグバンは一九四〇年代、米国の物理学者ジョージ・ガモフが唱えた。宇宙は超高温高密度の小さな状態から、大爆発とともに急激に膨張したという考え。遠くの銀河などの観測から今も宇宙が膨張していることが確かめられている。

気体が膨張すると温度が下がるのと同じ仕組みで、宇宙の温度は宇宙の大きさに反比例する。時間をさかのぼっていくと、宇宙の大きさがゼロになる時点で温度と密度は無限大になる。

この状態は物理学の法則や理論では手も足も出ない。結局、過去のある時点で「神の一撃」があり、ある大きさやエネルギーを持った宇宙が生み出されたとしておくしかなかった。

ところが、八〇年代、米国の物理学者アレキサンダー・ビレンケン博士や英国のステイブ・ホー

キング博士は、宇宙の種は神の創造がなくても「無」から生まれることを示した。「ビレンケン」は時間も空間も物質もない状態という言葉をよく使います。哲学的にも宇宙は何もない状態から始まったというしかないんです」と東京大学の佐藤勝彦教授（宇宙論）は解説する。

単に物質がないだけでなく、その入れ物である空間さえも存在せず、時さえもない無の状態。その状態から、ある確率で極めて小さい宇宙が生まれる。ホーキングは、宇宙には始まりとか終わりとかいう「境界」はないという理論を組み立てた。いずれも、「神の一撃」がなくても宇宙は始まるという理論だ。難解な数式でしか表現されず、日常的な感覚でとらえることはまず不可能だ。

例えば、時間の流れの中で生きる私たちは「宇宙が始まる前」という疑問を何げなく口にする。が、宇宙の始まりの前は、時間さえなかったとすれば、「その前」という質問そのものが成り立たなくなってしまう。

以上の解説の要点は以下の通りであろう。

- * 1、現在宇宙は膨張を続けていることが実証されている。
- * 2、これを過去に遡っていくと、宇宙の大きさがゼロであった時点に行き着く。
- * 3、その時点こそ宇宙誕生の瞬間であり、その時点にまさに創造者の一撃があったのだと思われるかも知れない。

* 4、しかし、「米国の物理学者アレキサンダー・ビレンケンや英国のステイブ・ホーキング博士は、宇宙の種は神の創造がなくても「無」から生まれることを示した。」その「無」とは「単に物質がないだけでなく、その入れ物である空間さえも存在せず、時さえもない無の状態」であった。以上を最も重要な一点に絞れば、「無からの宇宙誕生」であろう。

さて、これによれば、宇宙誕生の前には何があったのか、神か、それともその他の何かか、ということは問題にならない。なぜなら、宇宙誕生の「前」というものはないのだからである。時間も空間も如何なる物質もない完全なゼロから宇宙は誕生したのだ。——これが現代科学の最先端の考えだということになる。⁽¹⁾

こういう科学的な宇宙観を教えられる現代の若者は、キリスト教が説く「神」の存在をどう受け止めるであろうか？否、信仰者自身はどうか？神が存在し得る「無」がどこかにあるか？それを科学者も受け入れることができるように説明できるか？

(ロ) しかしビッグバン理論を受け入れた上で、疑問は残らないか？

一点疑問が残る。それは以下の疑問である。

「単に物質がないだけでなく、その入れ物である空間さえも存在せず、時さえもない無の状態」、「時間、空間、物質がまったくない」無の状態から宇宙が誕生したということは科学的に理論づけられていることであるから、それとして受け入れるとしても、しかし、そのことは宇宙が本当に完全な無から生まれたということの意味

するであろうか、むしろ意味しないのではないか。というのも、宇宙は「時間、空間、物質がまったく無い」無の状態」から生まれたという、そのことは何の法則もなしに起こったのか？何の法則に従うこともなしに宇宙は生まれたのか。科学者達はそう考えているか。否であり、法則に従って生まれたと科学者達も考えているのではないか。時間、空間、物質は全くなくても、法則は存在している中で、そしてその法則に従って、宇宙が爆発し、誕生したのではないか。

法則というものが現実には存在するということを否定する人は、現代人と言えども、若者と言えども、ないであろう。法則は現にある。では、それはいつからあったのか？宇宙誕生の後か？それともその前か？それとも同時に？ビッグバン説はこの問題を避けているようである。いや、むしろこの問題があることに気づかずに通り過ぎていたのではないか。しかし、今述べたように、法則に従って宇宙が誕生したのであれば、出発点は完全な無ではなかったのである。では、その法則はどこにあったのか。いや、今もその法則に支えられて宇宙が存在しているはずであるから、法則は現にある。では、それは一体どこにあるのか？

(ハ) そもそも法則とはどういうものか？

法則というものは、これが根本的に重要であるが、言うまでもなく、物質ではない。法則には「重さ」はない。望遠鏡を使おうが、顕微鏡を使おうが、法則の色や形を見ることはできない。法則が空間の中に色や形を持って場を占めているということはそもそももない。同様に、法則は一定の色や形を持つものとして時間の中に場を占めているということもない。「然々の時点から然々の時点まで存在する法則」というものはない。法則は「永遠

に「存在し続けるはずである。

しかし法則は永遠に存在すると言っても、無限の彼方から無限の彼方へと流れ続ける、無限の長さの時間に存在するということではあり得ないであろう。なぜなら、ビッグバン理論では、そういう無限の時間の存在は否定されているのだからである。時間には始まりがあった、時間は宇宙の始まりと共に始まった、とこの理論は言うのである。しかし宇宙が法則に従って誕生した、その法則は宇宙の誕生に先だつてあったのでなければならぬはずである。しかし「先」と言うと、時間的な「先」になってしまうから、そうではない「先」でなければならぬ。時間が存在する以前の「先」とはどうしても「時間の外」ということではなければならぬであろう。法則は「時間の外の次元」にあるのである。或いは「時間を超える次元」にあるのである。もちろん時間だけでは無い。時間も空間も如何なる物質もないところにあると見ざるを得ない。「ところ」と言うと空間になってしまつて、まずいのだが。法則は時間と空間と物質が存在しない世界にある。もし「宇宙」、つまり私たちがその中に生きている時間的・空間的・物質的世界を「この世」と呼ぶなら、法則はこの世にはなく、「あの世」にあると言わなければならぬであろう。法則は「宇宙」とは別の世界（——「非宇宙」と呼ぶべきか？「超宇宙」と呼ぶべきか？）に存在すると見なければならぬ⁽⁸⁾。それは宇宙がやがて消滅することがあつても、それに少しも影響されずに、変わることなく在る世界である⁽⁹⁾。

しかし、法則は超宇宙にありながら、それでいて宇宙の中に存在する物質を「支配」すると見なければならぬ。宇宙の中の自然現象はすべて法則に従つて起こっているからである。その点を捉えれば、法則は宇宙の「外」から宇宙の中にあるものを支配すると言わなければならぬであろう。（——「外」という言葉を空間的な「外」と

取ってはならないのだが。) 法則は非物質でありながら、物質に働きかけて来るのである。しかし、物質に働きかけて来るからといって、法則は物質と同等の身分で宇宙の中に存在して来るのではない。法則は物質と衝突したりしない。物質としては「無」であるから衝突しようがないのである。物質としては「無」である法則が物質に支配を及ぼしているのであるが、しかしその時も、法則そのものが物質と「共」に宇宙の中に存在していることではないであろう。例えば、二つが「同時に」存在していることはない。片方は時に属さないのである。どこまでも法則の本当の「ふるさと」は「あの世」であり、「あの世」から「この世」に「出張」(?)して来て、この世の中のものに支配を及ぼしているのである。

こうして、法則は物質としては「無」であるから、ビッグバン理論が言う「無」——宇宙がそこから誕生した出発点の「無」——に存在したのである。そしてその法則に従って宇宙が生まれたのであり、今も、今後も、宇宙の中でのすべての自然変化が、この「無」の世界にある法則に従って起こるはずである。また、法則が属している「無」の世界は無時間の世界である以上、宇宙に属しているものに対する法則の「時間的」距離は宇宙が生まれた瞬間と現在とで変わることはないのではないか。宇宙の内部では宇宙の誕生は137億年前にあったことであっても、法則が存在する次元では時間が経過することはない。法則の世界はいわゆる「永遠の今」であるのではないか。⁽¹⁰⁾ 宇宙の中で今後起こる一切の、無限数の、天体の(また自然界の)動きが、無時間の不動の法則の中には全部が丸ごと「書き記されて」おり、従って宇宙を超えた次元にある法則は宇宙内の未来の出来事をすべて「見渡している」のではないか。未来だけではない。過去から未来に亘る一切の宇宙内の変化を法則は永遠の今において「俯瞰して」いるのではないか。言い換えれば、永遠の今において支配しているのではないか。

宇宙内の存在者が経験した過去の時間は一体どこへ去って行ったのか？まだ経験しない未来の時間はどこから来るのか。時間とはどこから来て、どこへ行く、何ものか。——時間は、宇宙内の私たちにとって、それなしには自らが存在し得ない、抜き差しならぬものであるのに、私たちは、この素朴な問いに何も答えられない永遠の謎の中を、とかくただ流されるままに、“忘却の”生を？生きていく。⁽¹⁾

(二) 以上見てきた法則と宇宙との関係は、聖書の教えに関して何を明らかにするか？
次のように言つてよいであろう。

現代の最新の宇宙科学研究は宇宙とは別の、異次元の、完全に非物質的な、世界が実際に存在することを明らかにした。⁽²⁾そして、その異次元の世界に存在する法則の支配の下で、我々の現実の世界(「この世」)は存在し、動いていることを明らかにした。

① そうであれば、現代の最新の宇宙科学研究は聖書が「天」と呼んでいる存在次元が実際に存在する可能性を否定しないであろう。

② また、聖書の中で、天に存在していて、宇宙と宇宙内の一切のものを支配すると思われる究極の存在(X)——“神”——が実在する可能性を否定しないであろう。
それぞれをもう少し詳しく見よう。

① 法則というものは「この世」、つまり私たちが今その中に生きている宇宙内の世界とは別の次元に存在する——このことが明らかになった。ところで、法則が存在することは否定できないのであるから、法則が存在する

別の次元が実在することも否定できない。——このことが明らかになったのである。

ところで、聖書は神が存在する場所を「天」⁽¹³⁾、或いは「天国」「天の国」「天の御国」と呼び、そのイメージを膨らませて来たが、それは、現代の科学を踏まえれば、まさにこの宇宙と別の次元のことではないか。もちろん、聖書はまだ今のような宇宙観のない時に書かれたから、天とは時間・空間・物質が存在しない世界だといった、はっきりしたイメージを示してはいない。しかし、ともかく、天はこの世界と全く異なった、むしろこの世と反対ですらある、そしてこの世界をはるかに超えた高いところにある、全く澄み切った、透明な、清らかな世界としてイメージされて来たのである。その曖昧な、何となく夢のような、懂れにとどまっていた「天」・「天国」が夢・幻ではなく、現実に存在するのだということを、現代の宇宙科学は明らかにしたのではないか。

② 第二に、「天」に存在すると信じられて来た神の存在の可能性も否定されないということも示されたのではないか。このことをしっかりと掴むためには、宇宙の創造者としての神と法則とは、切っても切れない、密接な関係にあることを見る必要がある。

「法則」という言葉は日本語訳聖書には極めてわずかしか出て来ない。「神と律法」と言えば、これは聖書の中で全くお馴染みのことである。律法は、モーセのような特別な人が、神から授かったと聖書は説いている。ところで、日本語では「法則」と「律法」とは別の言葉だが、英語ではどちらも *Law*、ギリシア語でもどちらも νόμος で、区別はないのである。日本語では、「律法」とは「人間の行いはどうあるべきか」を定めたものであるのに対して、「法則」とは「自然界の事物はどうあるべきか」の定めであって、別のものだと考えられている。ところで、法則は人間が定めたものだと考える人はないであろうが、律法というものは人間が定めたものだと考

えるのが日本では普通かも知れない。しかし聖書は、そして三宗教の人は、そうは考えないのであり、「律法」も人間ではなく、神が定めたものだともみなしている。もちろん、日常生活に関わる施行細則は人間が決めるであろう。律法にはそういうものも含まれているであろう。しかし施行細則がそこから導き出される最も根本的な律法（聖書では「十戒」、「愛の二つの戒め」¹⁵）とそれから派生する諸々の無数の戒め）は、人間が定めたものではなく、宇宙をあらしめている究極の存在（神）が定めたものである。そうである以上、最も根本的な律法もまさに「行いの法則」であり、人間自身が作り出すことはできないのである。「作り出す」という言葉は十分に正確な意味で使われなければならない。もっと正確には、人間が「行いの法則」を「創造する」ことはできないのである。人間はそれを「見出す」ことはできる。しかし「創造する」ことはできない。自然法則を人間は見出すことはできるが、創造することはできないのと全く同じである。

こうして、法則には「物質はどうあるべきか」の法則と、「人間はどう行うべきか」の法則があるが、二つは法則である以上、どちらも我々がその中に生きていく宇宙の「外」の世界、宇宙とは別の次元、「あの世」、「天」に存在している。ところで法則は存在することが間違いない以上、それを定めた究極の存在——それは神でしかあり得ない——が「あの世」、「天」に存在するに違いないと、三宗教およびそれを信じる人は考えているのであるが、無から宇宙が誕生したと主張するビッグバン説はそれに寄り添いはしても、それを否定することはないであろう。もちろんビッグバン説はそれを主張することもしない。宇宙と別の世界で起こっていることには科学は全く立ち入ることができないのである。科学はそういう世界の問題の前では思考停止する。しかし、自然界の法則と人間の行いの法則を定めた、「天」に存在する究極の存在（神）を信じて、その「行いの法則」に従って生

きるということは何ら不合理なことではなく、一つの理に適った生き方であることは確かである。人間が生きる上で極度の苦難に遭遇し、万策尽きたときに、「この世」を超えた「あの世」に存在するはずの不可知の究極の存在に助けを求めずにはいられないことはまさしく「法則に適っている」、そして「法則に従っている」、合理的なことだと言わなければならない。「天」とは、宇宙を「有」の世界と呼ぶならば、「無」の世界であることを十分に刻まなければならない。「無」の世界の「無」とは何も存在しないということではなかった。時間的・空間的・物質的なものが何も無いということである。ということは、時間的・空間的・物質的でないものは、従って法則は、間違いなくあるのである。そして、その法則を神と認めるならば、神は間違いなく在るのであり、また法則そのものではなく、法則をあらしめている更に究極の存在(X)を「神」と呼ぶなら、神は間違いなく在ると言うべきなのである。¹⁶⁾

(ホ) 「靈」の存在と、神―法則―人間

ところで、時間も空間もない「天」には「物質でないもの」があると云ったが、「物質でないもの」とは正面から言えば何か。それは、旧約聖書ではヘブライ語で「ルーアツハ」(רוח)、新約聖書のギリシア語では「プネウマ」(pneuma)だと言われ、それがラテン語では「スピリトゥス」(spiritus)に、そしてそこから英語では「スピリット」(spirit)と訳されてきた。spiritは日本語では今通常「精神」と訳され、「物質」の反対は「精神」だと言われるだろうが、聖書では一貫して「靈」と訳されて来た。「ルーアツハ」・「プネウマ」・「スピリトゥス」には共通な点があり、それはどれもが元々は「風」とか「息」という意味だったことである。ただ、聖書がこれ

らの言葉を使うとき、それを空気という物質的なものとしての「風」や「息」と捉えてはならず、まさに非物質的なもの、⁽¹⁷⁾「精神的」なものとして捉えなければならぬのである。最も重要なことは、聖書では、霊は真つ先に神のものとして存在し、つまり神は霊として存在し、⁽¹⁸⁾神の霊が人間にも吹き入れられることによって、人間は霊の働きも持つ「人間」として生きるものとなったと書かれていることである。⁽¹⁹⁾

さて、「霊」がこのように元々神のものとして存在し、それを吹き入れられて、人間が「人間」として生きるものとなった所以のものであるということ踏まえるとき、人間に存在する「霊」とは「神をふるさととして慕い、尊び敬う心の働き」と捉えることが最もふさわしいことではないか。⁽²⁰⁾

「霊」である神と、その神の霊を自らの存在の根源であり根拠であるものとして慕い仰ぎ、⁽²¹⁾「霊の呼吸」を持つ人間——この二者の自然に根ざす関係がこのように捉えられるとき、三宗教の信者に対して起こるもう一つの「偶像崇拜」の疑いに対して答えることができる。つまり三宗教の信者が神に向かって言葉を語り、祈ることである。人はなぜ祈るのか。祈ったからと言って、そもそも神が人間の言葉を聴いたり、人間の言葉に答えたりすることがあるのか。そこにはまぎれもなく偶像崇拜——人間が神を作り上げて拝むこと——があるのではないか。しかし、そうは言えない。おおよそ「生きもの」というものは、すべて、生命の危機に陥ったとき、身悶えしないうであろうか。せずにはおられず、それは法則に従ってであろう。生命の発達段階に依じて、それぞれにふさわしい仕方、そうするであろう。草花は襲い来る危害に声を発して抵抗することはない。それでも激しい風には必死で抗い、身を真つ直ぐに持そうとする。動物が声を発して叫ぶことは一段進んだ身悶えの一つであろう。それは襲って来る敵への威嚇であると同時に、仲間への助けの呼び求めであろう。しかし人間の場合には、叫びは

それだけにとどまらないのではないか。人間は先ずは他の人間に向かって叫ぶであろうが、しかし人間には助けることが不可能な絶体絶命の極限状況に陥った時には、文字通り全身全霊からの叫びも発するであろう。それは「知るも知らないもない、ただ、ともかく絶対の力を持った、救う力を持った、何か」に向かってであろう。そしてその何かを日本人は「神」と呼んで来たであろう。事態はどんな民族にも共通であり、日本語の「神」に相当するそれぞれの名の「神」に向かって同様であろう。

ところで、このようにして神に向かって叫ぶことは偶像崇拜か？

否。ここには「作為」——人間の意志による「作り上げ」——は全くなく、一切は「自然」のままに進んでいると見るべきではないか？そして「自然」とは全面的に法則に従って進むものではないか？ここには法則に従った一連の動きがあるだけではないか？

意図して助けを求めているのではなく、「自（おの）ずから」、つまり法則に従って「動かされるままに」、助けを求めて、叫んでいる。この法則に従って動く一連の運動の一番大元に働くもの、自然全体を動かしているもの、人間を自らに向かって叫ばせているX、——これは「神」ではないか。

このX（神）に向かって、生きものはすべて、言葉の有無に関わりなく、生命の危機に際し、助けを求めて身悶えする。言葉を語らない生きものも身悶えによって「叫ぶ」のではないか。そこには最も原始的な、原初的な、「言葉」があるのではないか。この言葉が規則に則る本格的な「言葉」になるのはもちろん人間においてである。その人間は自らが全身全霊で助けを求めたXを「神」と呼んで、最大の畏敬の念をもって仰ぎ、祭り、礼拝するようになった。——この過程に虚構や作為などいささかもないと言うべきではないか。虚構があるとすれば、

それはその神を何らかの、目に見える偶像に作り上げたところにおいてのみではないか。

「祈り」は人間の霊が神の霊と自覚的に交わる第一の営みである。

ところで、祈りは多くの場合言葉によるが、しかしそうでない場合もある。例えば、目を閉じて外界（この世）との関わりを絶って、「靈想」（静まり切った、澄み切った黙想）の中で自らの霊で神の霊に触れる、或いは神の聖なる霊を自身の霊にいわば「吸い込んで」「聖化される」というように。霊は物質ではなく、物質的には「無」であるから、透明（無色）が色彩画の中に行きわたるように、神の霊は、法則と同様、この地上の世界の中のどこにも行きわたり、人間の直ぐ隣に、いや、人間と共に、いや、人間の中にも、今、現に、存在している。そして靈想の中で、人間は——霊のみになり切った心の集中の中で——根源の霊に直（じか）に触れることができるのである。

しかし、また、言葉による「祈り」を通しての靈的交わりももちろんある。ここで先程の疑問に答えるところへ来ている。——神が人間の言葉を聴いたり、人間の言葉に答えたりすることがあるのか？そもそも神は言葉を語るのか？語るとして、何語を語るのか？

この問題に答えるためには、そもそも法則とは何語かを問題にしなければならぬであろう。答は「何語でもない」である。法則は言葉で言い表されても、法則そのものは言葉ではなく、物質のあるべき秩序（自然法則の場合）または人間の行為のあるべき秩序（行為法則の場合）である。法則は言語で把握され、言い表されるが、同一の秩序を、把握する者が自らの語る言語に応じて異なった国語で言い表すのである。こうして「あなたの口が、あなたに罪を犯させないようにせよ」と「Do not let your mouth cause your flesh to sin」とは異なった言語で

言い表されているが、言い表された法則そのものは、つまり秩序そのものは何語でもなく、ただ一つである。聖書には神が預言者に、とりわけイエス・キリストに、音声で語った言葉が無数に記されているが、事實は法則、つまり神の意志²²⁾を預言者が自らの語る言語で掴み取って音声で言い表したのである。確かに、神を信仰する人は、通常は目を閉じて、不可視の神に向かって、例えば、「神様、どうか私の口から発される言葉が、あなたに對して、また他の人々に対して、罪を犯すことのないようにお導き下さい」と祈るが、そう言葉を発している時の私の霊は私の直ぐ隣に、いや、私と共に、いや、私の中に、入り来たっている神の霊に触れている。神は「天の国」に存在するから、人間である私が存在する「ここ」をはるかに超えた無限の高みに存在すると通常意識されるが、しかしまた、同時に、もう一方で、私の存在する「ここ」に、私の直ぐ傍に、いや、私の中にすら、いてくださると意識されるのである。²³⁾

霊は生きているということと密接であるが、霊だけにある特徴は「自由」であることである。物質には自由がないが、霊には自由がある。人間は霊を吹き入れられて、靈的に生きているものとして、神の自由に対して自らも自由にかかわることができる。もちろん神の自由と異なって、身体も持つ人間の自由には限界がある。しかしともかく神の自由に対して人間も自由にかかわることができるのである。自由があるところには「自主」があり、人間は——被造物の中で人間だけは——「自分」というものを持ち、人間同士で、また神に対して、「自分」としてかかわり合う。人間は神の意志すなわち法則に自らの意志で従うこともできるが、反抗することもできるのである。ただ、法則に適わない生き方は何らかのひずみを自らに招かずには済まない。それが「法則」というものである。聖書が「罪」と呼んでいるものはこの「ひずみ」である。

(へ) いわゆる「奇跡」の問題

神とは空想の産物ではないかとの疑問には、もう一つ、奇跡の問題が含まれているかも知れない。現実の世界には絶対起こり得ないことが聖書には事実であるかのように書かれているではないか。

これに対する答えは、以下のものである。

いわゆる奇跡の記事は、この世を超えた、しかし、私たちが見たように、確かに存在する、超宇宙——「天国」からこの世に及ぶ神の働きを伝えようとして記されたものであるから、それは何らか私たちの霊にとつて重大な意味のあることとして、言い換えれば人が霊的に新生する道筋に沿って、読まれなければならない。

(ト) 神はどこに、どのように、存在しているか？

ひとまず考察を終えた。全体をまとめよう。

三宗教が礼拝している「神」は、時間があり、空間があり、物質がある存在領域——「宇宙」——の中に存在することはなく、宇宙を超えた世界——時間・空間・物質がないけれども間違いない存在している世界——「超宇宙」、「あの世」、「天の国」に、「霊」であるものとして存在しており、そこから法則によって①宇宙の中にある物質を運動・展開すると同時に、②ご自身の「霊」を吹き入れられた「人間」という特別な生き物には「行いの法則」を示して、それに従って生きるように導いている。——このことは宇宙科学のビッグバン理論(宇宙は無から誕生したという理論)と衝突することはない。⁽²⁴⁾むしろビッグバン理論は、これまで空想の産物とみなされることもあった「あの世」が事実存在することを明確に示し、一つの根拠に基づいて神が実在する可能性を指し示

した。⁽²⁵⁾

(チ) 総括

人間が自らに存在させられている霊に基づいて、源の霊である、そして宇宙万物を存在させている、全知・全能の究極の存在(X)——「神」——の实在を信じ、その『言葉』(法則)に従って生きるということは少しも不合理ではない。それを信じないときには、一切を闇雲に閉じこめたまま、人生を終わることになるであろう。

宇宙万物の存在の鍵を握る最根源の何か(X)は、今後どんなに科学が発達しようと、永遠に完全には知り得ないままにとどまるであろう。しかし永遠に知り得ないものであるとしても、それはまさにありとあらゆる物の存在の鍵を握るものとして、ありとあらゆるものの大きさに匹敵する重要なものであることは間違いない。その不可知の、最も大いなるものを前にして、静かに頭を垂れないことは、人間として最も根本的な、最重要のことを欠くことにならないか。



今回の発表の要点は、今後宇宙科学の研究成果がどのように変わろうと、影響を受けない。なぜなら、どんなに成果が変わるとしても、宇宙が或る法則に従って生成・発展するということは動かないが、①法則は宇宙(時空的物質界)の内部にではなく、超宇宙(非時空的、非物質的世界、「あの世」、「天国」)に存在していること、②その超宇宙の法則に従うことなしに宇宙の中の自然の変化は存在しないこと、③またその「行いの法則」に従わな

人間の行いは必ず「ひずみ」を来すということ、——この三つのことは変わることはないからである。



なお、法則は「あの世」に存在する、つまり宇宙がそこから誕生した「無」に存在する、との私の考えは、宇宙学者からご覧になって、どうかを知りたくて、佐藤勝彦教授にメールでお尋ねしたところ、次のようなご返事を頂戴した。お答えは、時間も空間も物質もない世界のことは科学の立場では答えることができない問題だが、ビッグバン理論が宇宙の始まりに想定している「無」は現在の物理法則や理論を適用の限界まで適用した結果果っているものなので、そういう意味では、その「無」（つまり時間・空間・物質のない世界）の中に物理法則はありと考えられていると言えるであろう、との主旨であると思われる。ビッグバン理論はどこまでも一つの仮説、但し今日多くの科学者は認めている仮説だとの立場に立って、慎重にはあるが、私の主張にご理解を示して下さいと見ていると見てよいであろう。

* * *

佐藤勝彦先生

私は一九七〇年から二〇〇六年まで、大学で西洋哲学を講じて来た者でございます。高校生の頃までは理系に進むつもりでしたが、浪人中に心境の変化を来し、哲学の道に進んだのですが、ただ、哲学に軸足を置き

ながらも、理系の問題にも関心を持ち続けて来ておりました。宇宙科学への関心も同様でしたが、最近必要があって先生の、嘯み砕いてご解説くださったご著書『大宇宙・七つの不思議』など、幾つかを拝読し、大いに教えられると同時に、一つの根本的な、おそらく半ば哲学的な、問題に突き当たり、先生には是非お尋ねして、お教え頂ければと願うに到りました。

それは以下の通りです。

先生のお考えは

① 宇宙は今からおよそ137億年前に、「時間、空間、物質がまったく無い“無”の状態から、量子重力的效果によって創生された。」

② 「創生された量子宇宙は、素粒子の大きさにも満たない、プランクサイズと呼ばれる10のマイナス33乗センチ程度の宇宙だが、それが「インフレーション」と呼ばれるメカニズムによって、ただちに何十ケタ、何百ケタと引き伸ばされ、マクロ宇宙となった。そして、潜熱の解放により、火の玉宇宙（ビッグバン）となった。インフレーション中の量子ゆらぎは引伸ばされ、今ある宇宙構造種が仕込まれた。」

と要約して述べられていますが、そしてそれは実証されている揺るがないことと思いますが、ただ、私にはこれを承認した上で、一つ新たな疑問が生まれております。それは、宇宙は、以上のことを認めてもなお、全くの無から誕生したとは言えないのではないか。なぜなら、それら一切は法則に従って起こったことであり、従って法

則だけは宇宙誕生以前に（「以前」と言いましても時間が存在しないところなので、まさに「無」とされたところ）存在したのではないか。宇宙は「時間的、空間的、物質的に無の、しかし法則だけは存在する」状態から誕生したのではないか。

法則は時間的、空間的、物質的な存在ではなく、従ってまさに宇宙誕生以前の「無」の状態の中に存在し得るのではないか？——こんな風に思われるのですが、これに対しては先生はどのようにお考えになるでしょうか？

ご多忙の中、まことに恐縮でございますが、この素朴な疑問にお考えをお聞かせ頂ければ、まことに幸甚に存じます。

二〇一八年五月二一日

遠藤 徹

* * *

遠藤徹先生

これに科学的にお答えすることは不可能と思いますが、私なりの考えを申し上げたいと思います。

A・ビレンケンの「無」（時間・空間・物質の存在しない状態）からの宇宙創生理論」、またS・ホーキングの

「無境界仮説」は、現代の物理学を宇宙の初めという極限まで適用すれば、どのような描像が得られるのか研究したもので、未完の量子重力理論を使って考えた、あくまでも仮説です。もっともらしいシナリオが描けるので、この仮説は多くの科学者に受け入れられている、今日の一つのパラダイムです。

物理学の法則は時間・空間・物質の運動の法則であり、それら（時間・空間・物質）が存在しないところでは無意味ですが、「無」の状態は、現在の物理法則や理論を適用限界まで適用すれば考えることはできません。つまり、その状態にも量子重力理論を適用すれば考えられるということ、そういう意味では物理法則は存在していると考えているのでしよう。

御参考になれば、幸いです。

佐藤勝彦

註

- (1) 「神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ」（創世記5・1、同1・26）
- (2) 「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。あなたはいかなる像も造つてはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造つてはならない。」（出エジプト20・3-4、申命記5・8-9）
- (3) 初めに、神は天地を創造された。（創世記1・1）
- (4) 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、（出エジプト3・14）

- (5) 神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。(ヨハネ4・24 新改訳)
- (6) 神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。(1コリント1・9)
- (7) ◇佐藤勝彦教授の『大宇宙 七つの不思議』(PHP文庫、二〇〇五年)や『宇宙96%の謎 最新宇宙学が描く宇宙の本当の姿』(実業之日本社一九九一年)によって、もう少し詳しく言うと、
① 宇宙は今からおよそ137億年前に、「時間、空間、物質がまったくない」無の状態から、量子重力的効果によって創生された。
② 「創生された量子宇宙は、素粒子の大きさにも満たない、プランクサイズと呼ばれる10のマイナスイオン程度の宇宙だが、それが「インフレーション*」と呼ばれるメカニズムによって、ただちに何十ケタ、何百ケタと引き伸ばされ、マクロ宇宙となった。そして、潜熱の解放により、火の玉宇宙(ビッグバン)となった。インフレーション中の量子ゆらぎは引伸ばされ、今ある宇宙構造種が仕込まれた。」(*急激な大膨張)
- (8) 完全な無から法則とそれに従う宇宙とが一体になって誕生したということはあり得たであろうか？それはあり得ないはずである。宇宙は時間的・物質的であるのに対して、法則そのものは無時間的・非物質的であるから、二つは次元を異にするのであり、両者が「一体になって」存在するということはあり得ない。法則が有限な時間と「一緒に」存在するということはあり得ない。
- (9) 法則以外にも、例えば「エネルギー」とか「重力」とか「磁力」などというものも肉眼に不可視であるが、しかしこれらは法則と同様に宇宙の異次元にあると言うことはできない。これらは物質の変化や運動を引き起こす「力」としてどこまでも物質と一体であり、物質界の存在である。これらはそれぞれの法則に従って宇宙の中で働く。
- (10) 「この世」(時空的、物質的世界)を「有」の世界とするとき、「無」の世界にある法則を探索するということは多くの宗教に共通することであろう。とりわけ東洋の宗教にそれは伝統的なことであろう。
- (11) 「無からの宇宙の誕生」ということは、驚くべき事に、ビッグバン理論に先立つ千五百年近くも前に、既にアウグスティヌスによって主張されていたことであった。彼は、神は宇宙を時間と共に創造されたと主張した。「時

(12)

間は何らかの運動なしには存在しないが、永遠の中にはどんな変化も存在しない。……何らかの運動によって何らかの変化を起こす被造物が生じなかったなら、時間は存在しなかったはずである。……聖なる、最も真実な書物は『初めに神は天と地を創造された』と述べている。このことは、神はそれ以前には何も創造されなかったと理解しなければならぬ。宇宙は時間の中で創造されたのではなく、むしろ時間と共に創造されたのである。』（『神の国』第11巻、第6章）この主張は、突き詰めれば、神は宇宙とは別の次元に存在するのであって、従って時間の中で永遠の長きに亘って存在することはなく、また当然のこと、空間内に物質的なものとして存在するのではないことを主張したことに他ならない。物質的宇宙の次元を「有」の存在次元とすれば、神は「無」の存在次元に存在し、時間・空間・物質の「無」から宇宙を誕生させたのである。

古代ギリシアの哲学者は専ら数学的な法則を念頭に置きながら、法則が「無時間的」世界に存在することを主張したが、今私たちが問題にしている法則は自然法則であるので、両法則は、同じく無時間的「永遠的世界」に存在するにしても、宇宙の中に現実存在する物質的なものを「支配」する仕方は両者で同じではない。数学的法則は、例えばピタゴラスの定理は、それ自身が「この世」の中に直角三角形を存在させるわけではない。この定理に少しでも近づく直角三角形をこの世に存在させるのは人間である。

しかし物理や化学の自然法則は宇宙内の物質的機構を自らに従って運動させたり、変化させたり、誕生させたりするのである。支配の仕方は、数学的法則は「形式的」であるに留まるのに対して、自然法則は「形式的且つ実質的」である。この違いから、ギリシアの存在論の場合には法則と法則の世界（「イデアの世界」）は「あの世」に実際に存在すると主張される一方で、頭の中で考えられる観念的世界に過ぎないと見られたりもした。この「イデア的、観念的、理念的、理想的」しかし、自然法則の場合には、それに従って宇宙（「この世」）の中に物質的存在が現に存在していることを根拠にして、法則が法則の世界（「あの世」）に「実在」していることは間違いないと考えさせられるのである。法則が存在している世界は「この世」と別でありながら、単なる観念的な、理念的な世界、頭の中で考え出される理想的な世界ではない。間違いなく別次元に実在し、それの下でのみ宇宙も現にあるのである。

(13)

聖書では、「天」という語は、神の天地創造の場合のように、物質界の天（天空）を指して用いられる場合と、

神の御座としての「天」を指す場合との両方がある。

(14) 「新共同訳」と「口語訳」で6回、「新改訳」では2回だけ、用いられている。

(15) 『イエスは言われた。』心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』（マタイ22・37・40）この二つの掟はそれぞれ旧約聖書の申命記6・5とレビ記19・18に基づく。

(16) 「法則」は「真理」と言い換えてよいはずである。アウグスティヌスが神をくり返し「真理」と呼ぶとき、彼はこのような神の把握に迫っていた（——神を「自己」の最内奥に探ねると並んで——）と言えないか。「あなたの法則は真理であり、そして真理はあなたです。（*lex tua veritas et veritas tu.*）」（『告白』第四卷第九章15）本文の中で「法則」と言われて来たところを「真理」に置き換えることは、真実の神に一層真実に迫らせ、また近づき易くさせる可能性がある。

(17) 「精神」は、「精神分析」や「精神病理学」などにおいて科学的に分析・究明出来ると考えられているであろうが、その場合の「精神」は、この二語の英語が、*psychoanalysis*・*psychopathology* であることに明らかな通り、ギリシア語に遡れば「プシケー *ψυχή*」であって、「プネウマ」ではない。それぞれの形容詞である「プシキコス *ψυχικός*」である人と「プネウマティコス *πνευματικός*」である人とは相反するとパウロが述べているように（1コリント2・14）、両者は異なる。「プシケー」は「精神」と言っても肉体に根ざして働く精神性であるが、神に淵源する「プネウマ」は肉体から独立に、肉体に影響を及ぼして、働く精神性である。プネウマの働きそのものは科学的に究明されることはないであろう。

(18) 「神は霊である。」（ヨハネ4・24）

(19) 「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記2・7）「鼻に命の息（ルーアツハ）」という表現は空気の呼吸と肉体的生命のことだけを言っている感があるが、「ルーアツハ」が、他の箇所でも「霊」と訳される文脈が圧倒的に多いことを考慮すれば、霊の呼吸と霊的な生をも含めて捉えるべきであろう。

(20)

神の霊が具体的に人間に「宿る」と言えるのは、人間が神の偉大さに何らか感動する（動かされる）ときであり、進んで神に祈り始めるときに本格的に存在し始めると言えるであろう。「霊」のより詳細な考察は次の機会に譲らなければならない。

(21)

この「法則」は「行いの法則」ではなく、むしろ「生命の法則」であろう。

(22)

法則は結局「……であれ」、「……せよ」という命令であるから、そこに「意志」を感じて、「神の意志」という言い方がなされるのは当然であるが、しかし神の霊の「意志」を、人間の意志と同じものとして捉えることはできない。神は時間・空間・物質の存在しない次元に存在する以上、神の「意志」の働きは時間・空間・物質（身体）に制約されることはなく、完全に自由であるはずである。それに対して、人間の意志は身体と結びついているのみ働くから、その働きは身体の拘束を受けて困難を伴う。法則とは完全に自由な神の霊の意志であろうが、神の霊の働きには最も重要なものとして「愛」も含まれるから、法則は神の「霊の愛の法則」でもある。聖書が独自に説く「愛」（アガペー）とは「霊の愛」（*ἡ ἀγάπη τοῦ πνεύματος*、ローマ15・30）、或いは「霊における愛」（*ἡ ἀγάπη ἐν τῷ πνεύματι*、コロサイ1・8）である。キリスト教徒とは、神を「私の父」と呼んだイエスが、何にも増して神の霊の愛の法則を生き抜いた事実に触れ、中でも愛を実践できない人間の「罪」をも赦す神の愛を、言葉で説いただけでなく、自らの十字架刑によって極限の形で実践した事実に接して、神とイエスを自らの「主」（全面的支配者）として受け入れ、その導きに従って生きることを決意した人々である。（キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」ローマ8・2）なお、キリスト教徒がイエスに従い、做って、神を「私たちの父」と呼ぶのは、神の「霊の愛」の働きに親しく触れて、その偉大さと暖かさへの溢れる畏敬と敬愛の念からである。しかし、そうしているときでも、人間の父親の姿を思い浮かべているわけではない。どこまでも、不可視の、霊的な、究極の、大いなる「方」に向かい合っているのである。

(23)

既に触れたように、聖書には神の「御顔」、「御手」、「御声」、「御足」とかの表現が出て来るが、それは、霊である神が今、ここで、言い表し難く深く、親しく、私の霊に「出会い」、「触れて」くださっていることの表現である。文字通りこれらを思い浮かべているのではない。「御声」も無音の言葉である。なお、祈りによって私

(24)

私たちは神に向かって語りかけるのであるが、しかし祈りは同時にそれに答える神の言葉（法則）を聴き取る場である。いや、むしろ聴き取る方に中心があるとすら言える。聖書を通じて示されている神の「意志」（法則）を聴き取り、それに従おうとすることなしに、専ら人間が自分の願いたい事をぶつけることは「祈り」とは言えない。神は、時間的・空間的・物質的世界である宇宙とは別の次元——時間・空間・物質が無い次元、宇宙を「有」とすれば「無」の次元に存在し、無から宇宙を創造したということ、先述した通り、アウグスティヌスが既に主張していたことであつた。このことが知られていたら、「神の一撃か、無から誕生か」という問題そのものがそもそも立てられることはなかつたであらう。

なお、キリスト教界の中でビッグバン理論がどのように評価されて来ているかについて、筆者は精通してはいない。カトリックの司祭で宇宙学者でもあつた Albert Lemaitre (1894—1966) が同理論を支持していたということは知り得ているが、例えば教皇庁の正式見解が表明されているかどうかは知り得ずにいる。聖書解釈との整合性を論じる積極的見解が示されているかは一層不明である。

(25)

ビッグバン理論が神の存在を否定するとの考えは、結局の所、聖書が神と呼んでいるものは「霊」として生きている、つまり非物質であるということを見逃しているところから生じていると言えるであらう。言い換えれば、神は人間の似姿だと取り違えているのである。「人格神」という日本語はこの点で誤解を招き易く、使用に十分慎重さが求められる。「人格神」とは人間の容姿・意志・感情を持つている神だといった解説をしている日本語の事典類が、広辞苑はさすがに別として、少なからずあるのには仰天させられる。